

大型水鳥類に関する最近の動向について(報告)

1. 取組の背景 — 生態系ネットワーク形成に取り組む目的

私たちの社会活動、経済活動に様々な恵みをもたらす自然生態系を守り育て、未来に継承していくためには、生態系ネットワークの形成という考えが重要となる。

- 急激な人口減少・少子化、災害リスクの増加、及び、地球環境問題といった、全国レベルでも地域レベルでも深刻化する各種課題への対策を効果的に進めるためには、生態系ネットワークの形成による自然生態系の保全・再生は欠くことができない要素。
- 斐伊川水系を取り巻く自然条件・社会条件は、**生態系ネットワークの形成**や、**自然環境を活かした地域振興を進める上で、全国有数の好条件を備えた地域**となっている。

人口減少しながらも、大都市圏との対流をおこすための「内燃機関」の構築・確保

地域
ブランド
確立

おとずれてみたい、住んでみたい、持続可能なまちづくり

観光振興

生態系
ネットワーク形成

防災減災の
推進

過去に失われた自然環境の保全・再生とその持続可能な利用

地方創生

自然環境を活用した土地利用・社会資本整備（グリーンインフラ）の推進

2. 生態系ネットワークとは

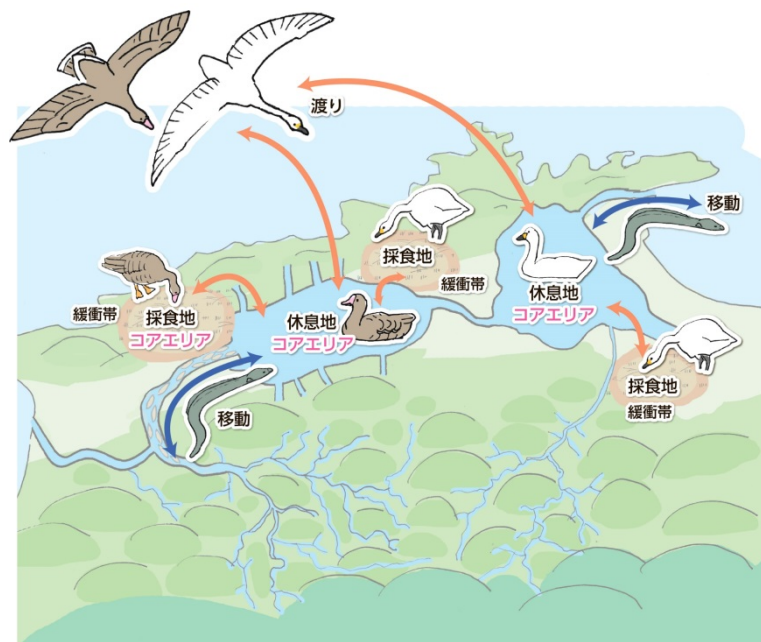
野生の生きものは、採食地や繁殖の場、休息する場など、さまざまな場を必要とする。それらの間を行き来・交流しながら、個体としての生活史や個体群を維持している。

多様な野生の生きものが生息できる自然生態系を、健全かつ安定的に存続させるためには、

生きものの生息に十分な規模の「**核となる地域(コアエリア)**」、および、それを取り巻く「**緩衝帯(バッファゾーン)**」を適切に配置・保全するとともに、

これらの生物生息・生育空間の「**つながり(コリドー)**」を確保すること、

すなわち、**生態系ネットワーク(=エコロジカル・ネットワーク)**を形成していくことが有効である。



コアエリア：動物の繁殖のための巣や食物を採る場所、休息をとる場所など、保全上中核となる場所のこと。

コリドー：コアエリアの間の行き来を可能とする環境のこと。

バッファゾーン：コアエリアやコリドーの周辺地域で、外部からの負の影響を緩和する役割を果たす地帯のこと。

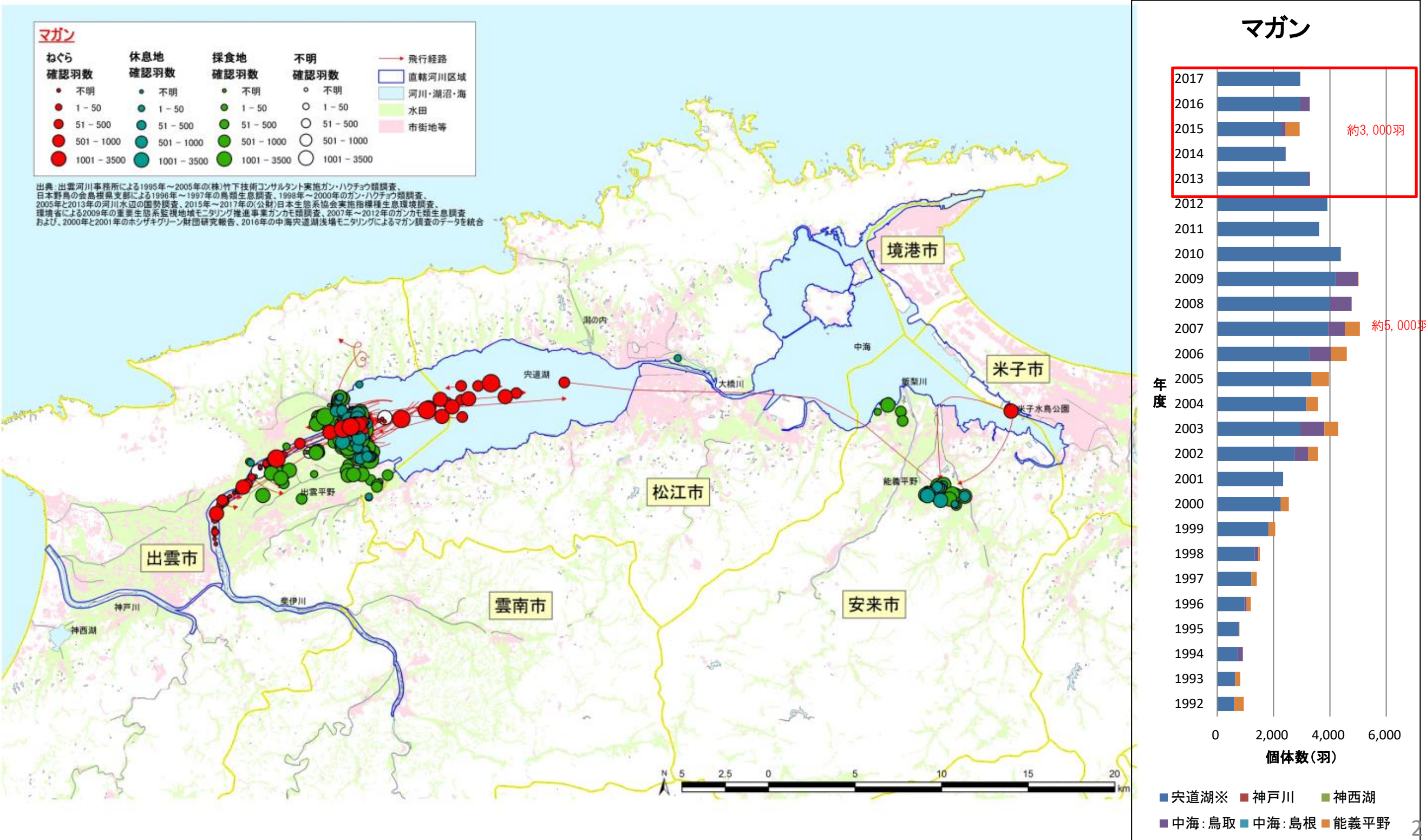
凡例

- コアエリア
- バッファゾーン
- コリドー



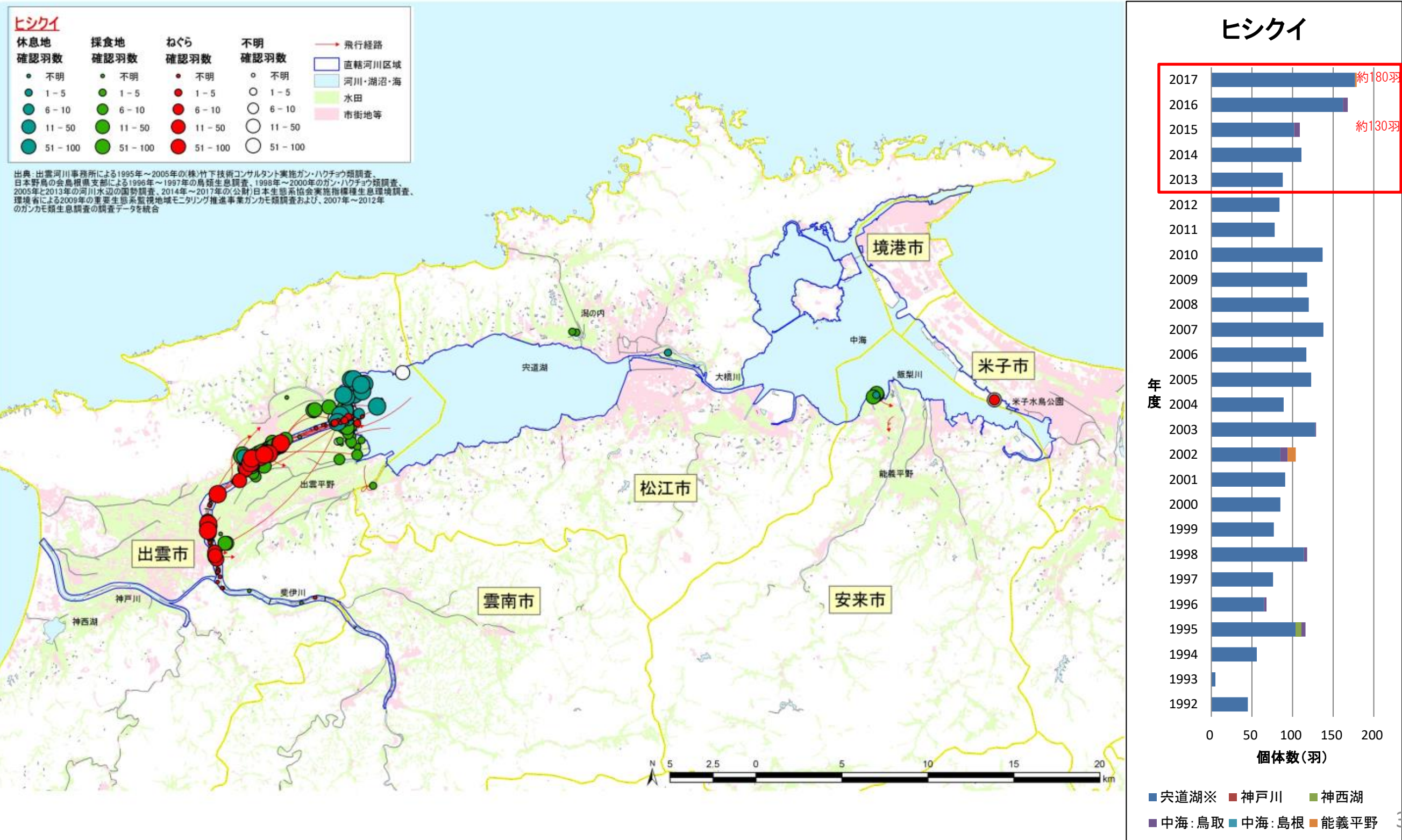
3. ガン類の飛来状況—マガンの近年における分布の概要

- ★マガンは2007年の約 5,000羽の飛来をピークに近年は約 3,000羽前後が飛来。
- ★主な生息地は、斐伊川河口・宍道湖西岸・能義平野。
- ★宍道湖湖心の湖面をねぐらとしている。



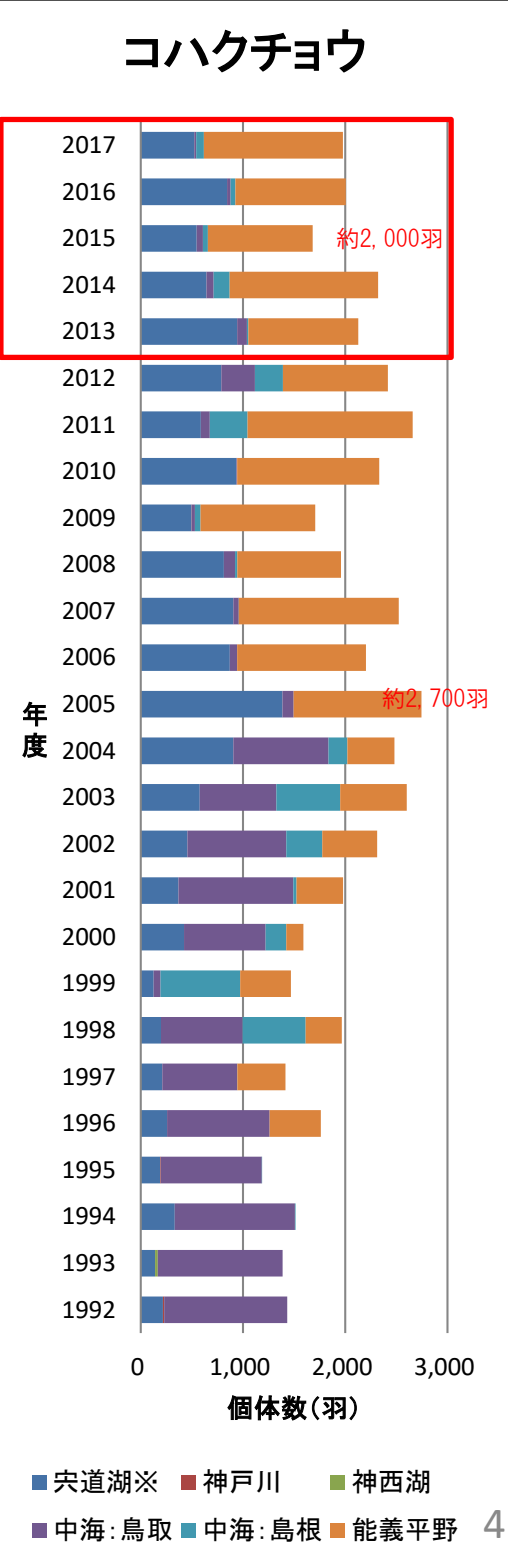
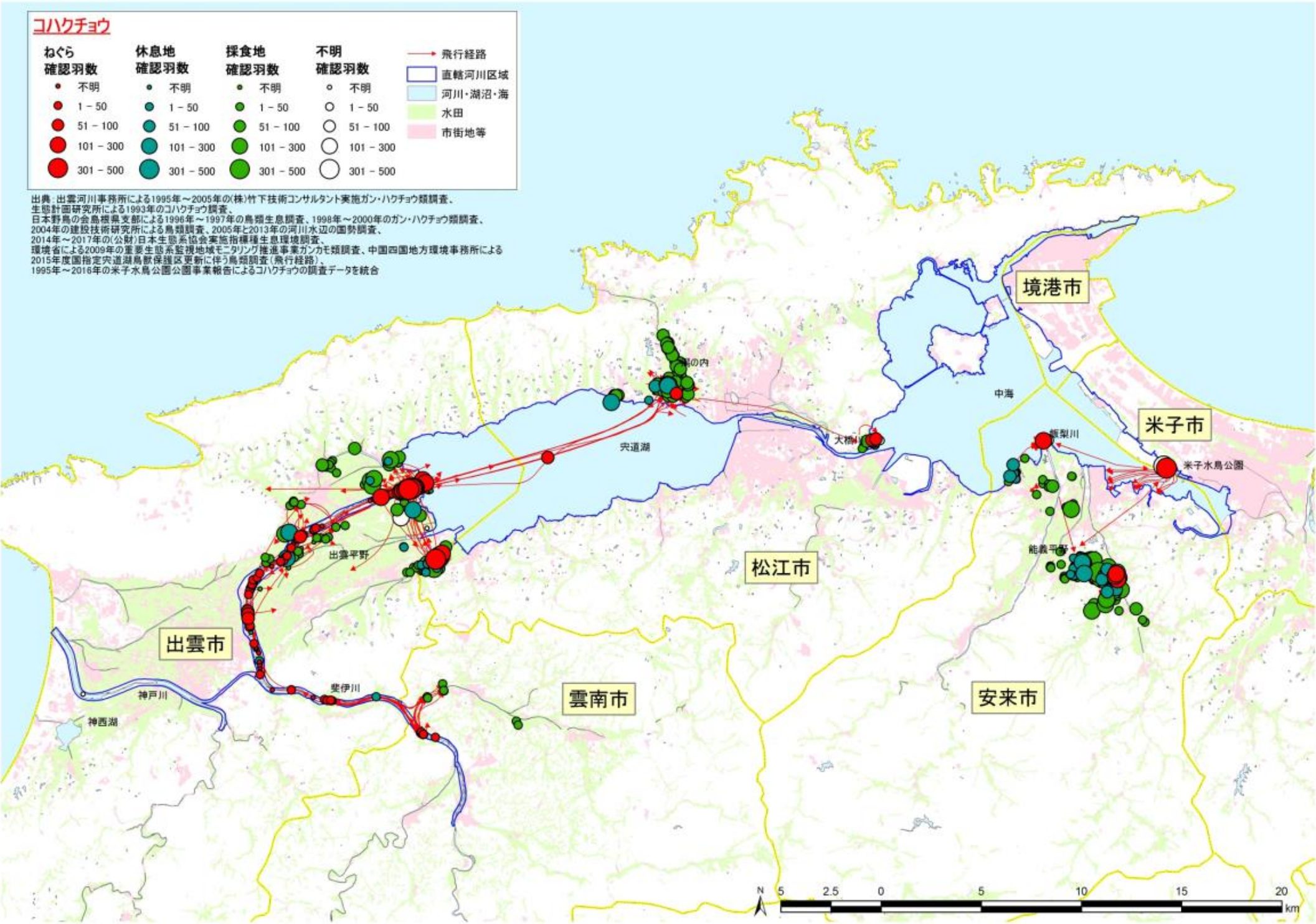
3. ガン類の飛来状況ーヒシクイの近年における分布の概要

- ★ヒシクイは2017年の約 180羽の飛来がピークで、近年は約 130羽前後が飛来。
- ★主な生息地は、斐伊川本川・河口・宍道湖西岸・米子水鳥公園。



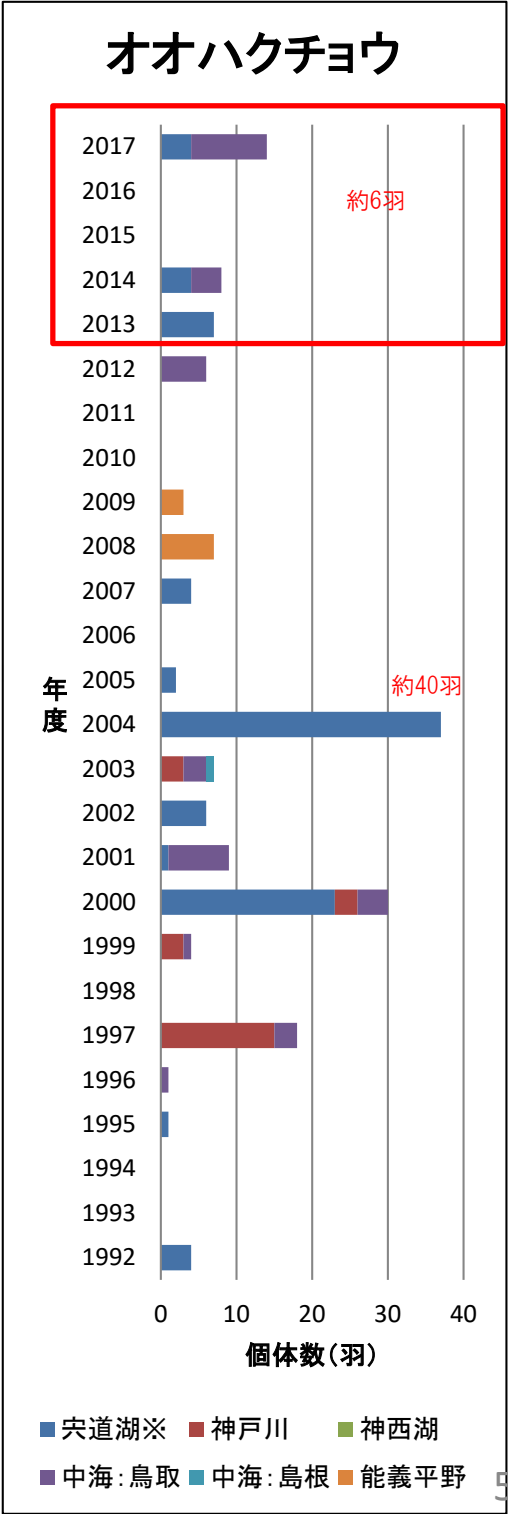
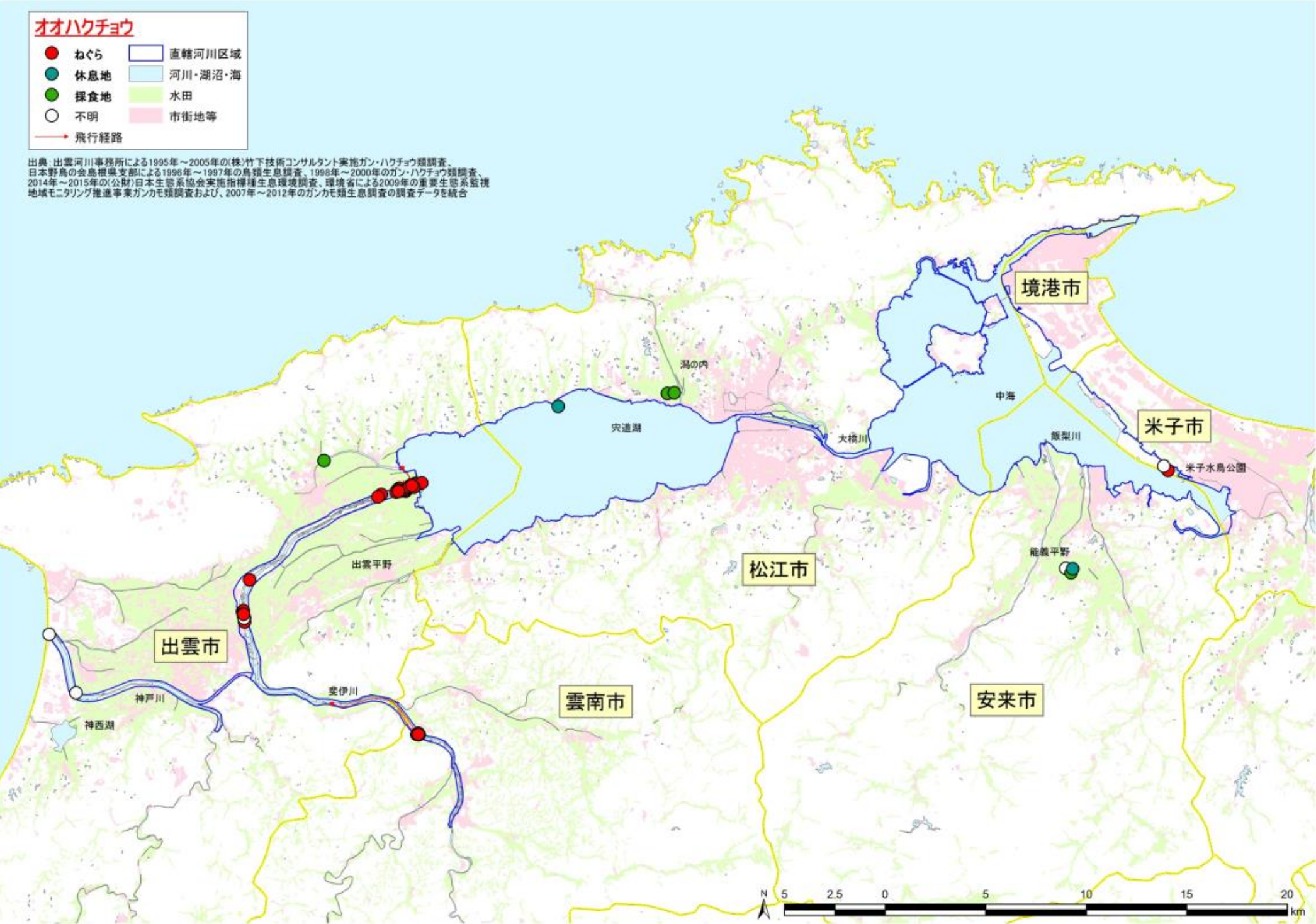
4. ハクチョウ類の飛来状況—コハクチョウの近年における分布の概要

- ・コハクチョウは2005年の約 2,700羽の飛来をピークに近年は約 2,000羽前後が飛来。
- ・西部では斐伊川本川を主にねぐらとし、斐伊川周辺、潟の内を採食地として利用している。
- ・東部では米子水鳥公園を主なねぐらとし、能義平野を主な採食地としている。



4. ハクチョウ類の飛来状況—オオハクチョウの近年における分布の概要

- ・オオハクチョウは希に飛来が確認されており、2017年も飛来が確認されている。
- ・斐伊川本川や米子水鳥公園をねぐらとして利用している。
- ・採食地としては潟の内や能義平野を利用している。



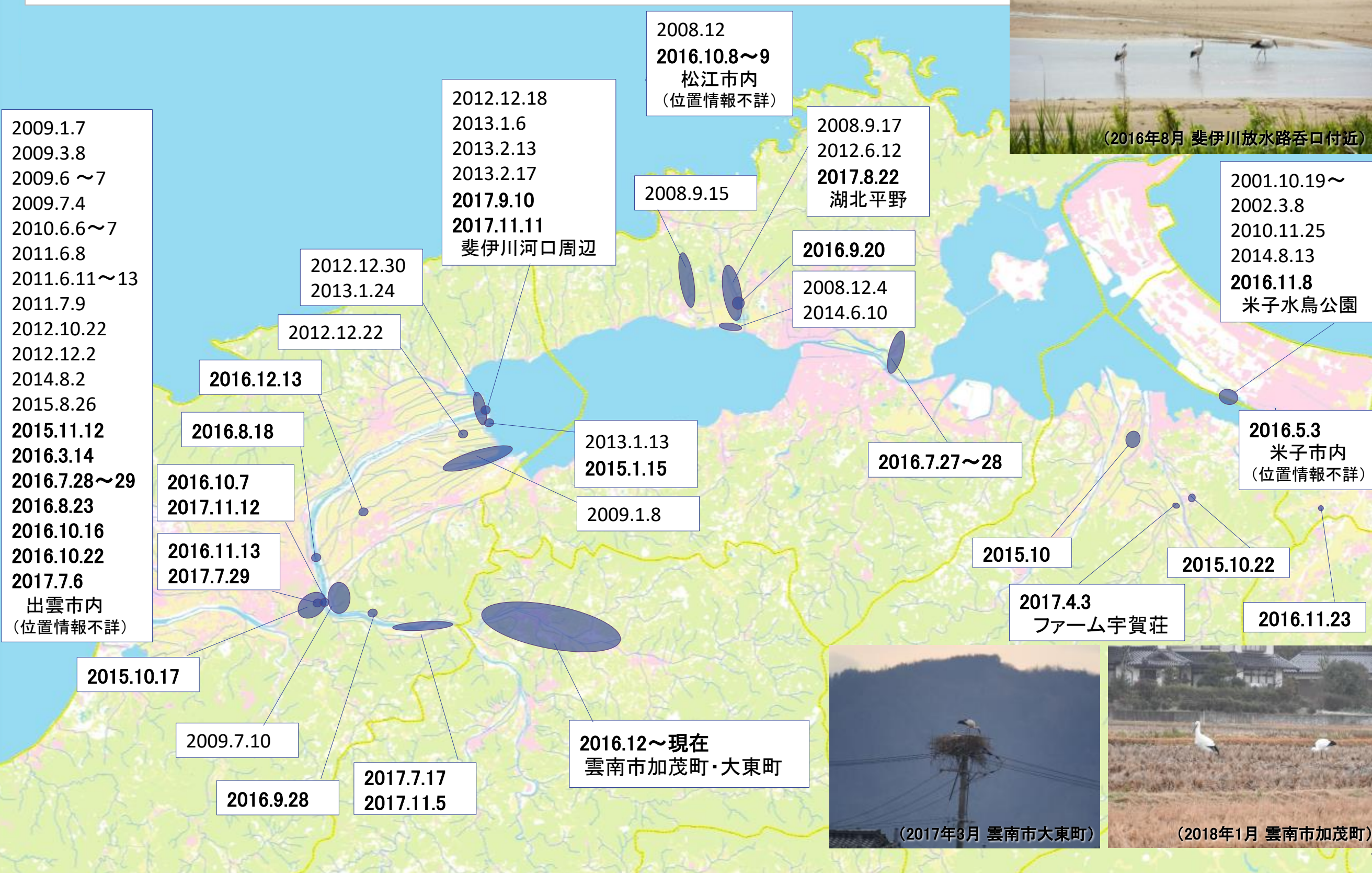
5. ツル類(マナヅル、ナベヅル)の飛来状況

- ・ガン類などくらべて数は多くないが、宍道湖西岸、潟の内、能義平野などで確認されている。
- ・2016年(12月～)には出雲平野で最大15羽のナベヅルが、2018年(1月～)には松江市・安来市で9羽のマナヅルと1羽のナベヅルが、安来市で1羽のクロヅルが確認されている。



6. コウノトリの飛来・確認状況

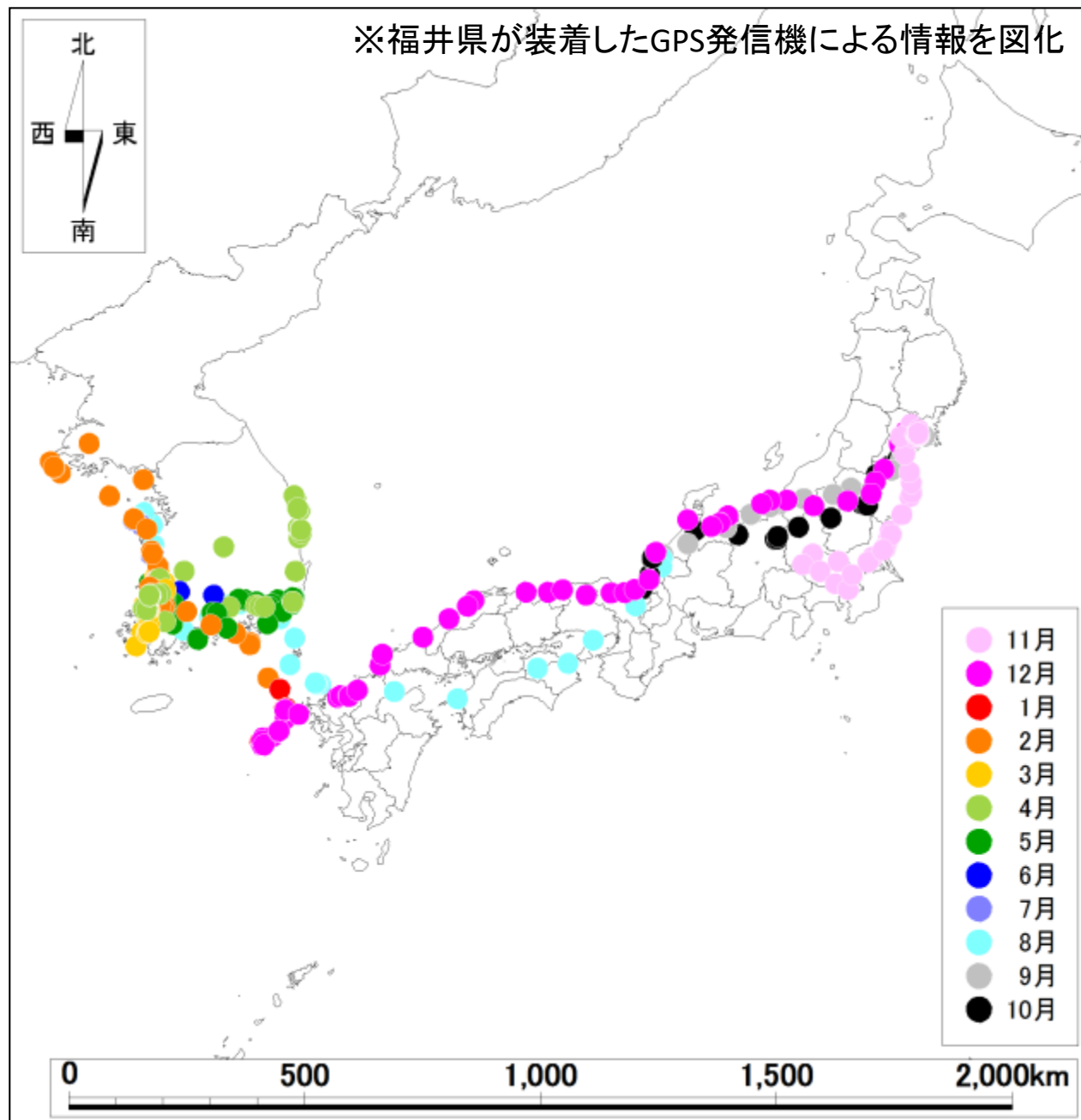
- ・兵庫県豊岡市等で継続している野生復帰事業による、野外放鳥個体が斐伊川水系にも飛来。調査などによる目撃の頻度は増加傾向。
- ・2017年には雲南市で営巣・繁殖行動が確認。



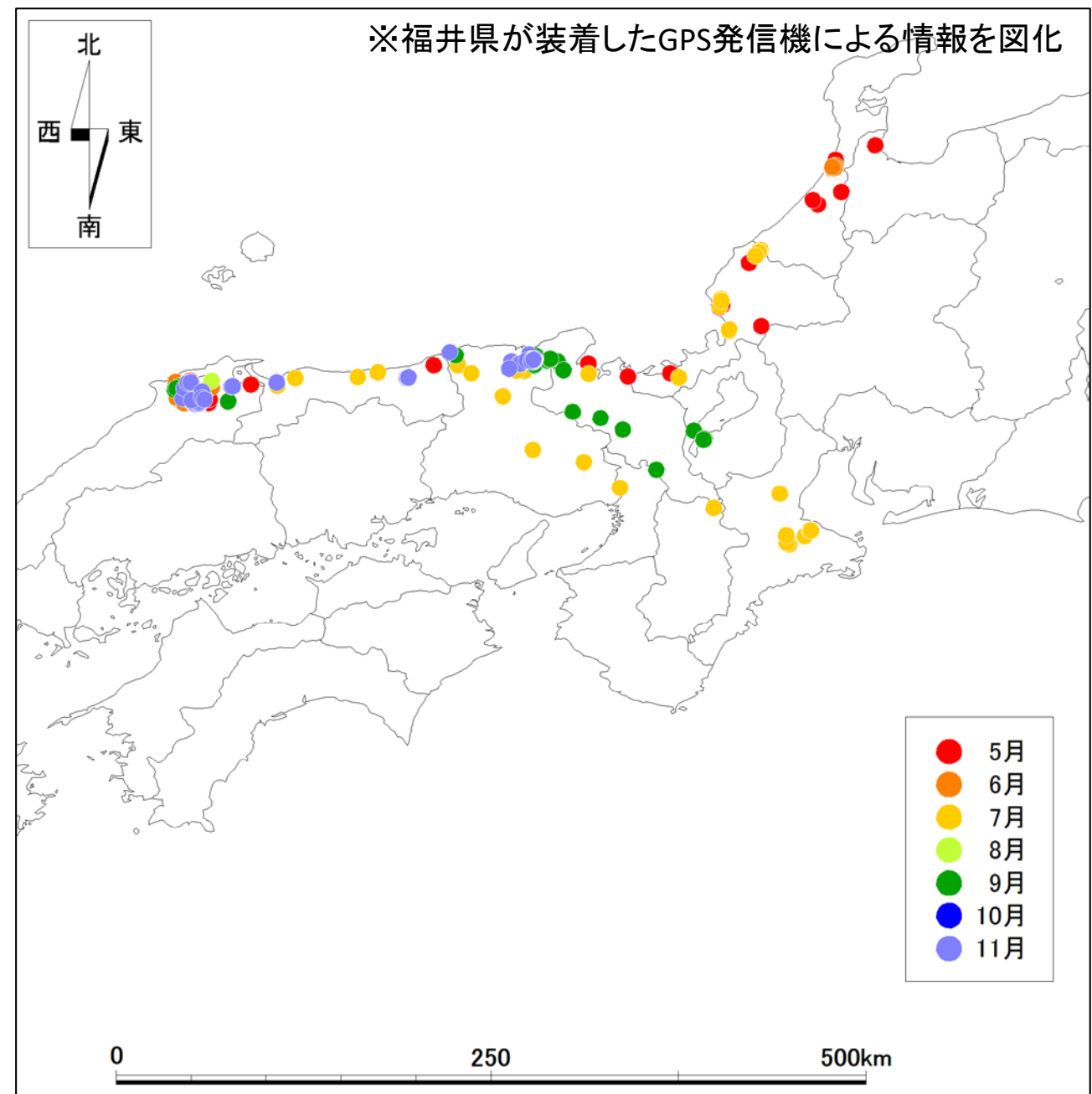
コウノトリ調査結果概要

・げんきくんの行動位置

- ・2016年11月に雲南市に飛来するまで、東は宮城から西は朝鮮半島まで広範囲に行動していた。
- ・ひな回収後は京都府京丹後市、兵庫県豊岡市で多く確認され、11月9日ごろに雲南市に飛来した。



行動位置(2015年11月～2016年10月)



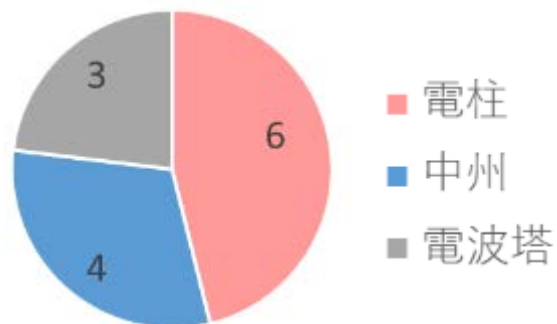
行動位置(ひな回収後)

コウノトリ調査結果概要

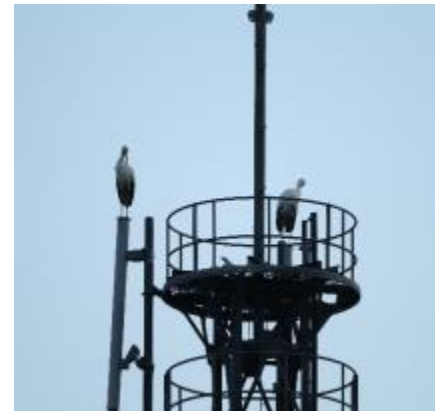
・ねぐらの確認状況

- ・9月調査での主要なねぐらは電柱、中州、電波塔であった。
- ・12月調査では電柱だけでなく、水田（刈取り後）をねぐらとする個体も確認された。

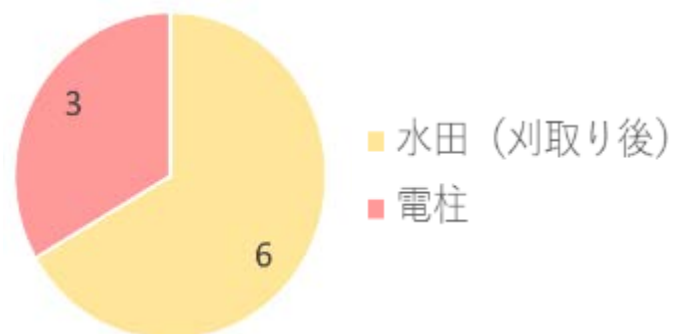
9月



ねぐら環境の内訳(2017年9月6～8日)



12月



ねぐら環境の内訳(2017年12月1～3日)



コウノトリ調査結果概要

採食環境

- ・9月調査、12月調査とも主要な食物資源はドジョウであった。
- ・12月調査では食物を捉える際に枯れた稲など植物ごとくわえることが多く、不明な食物の割合が増加した。

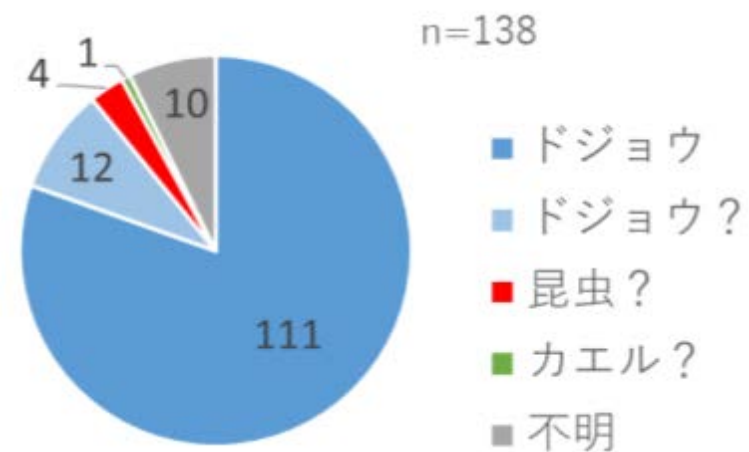
9月



食物の内訳(2017年9月6～8日)



12月



食物の内訳(2017年12月1～3日)



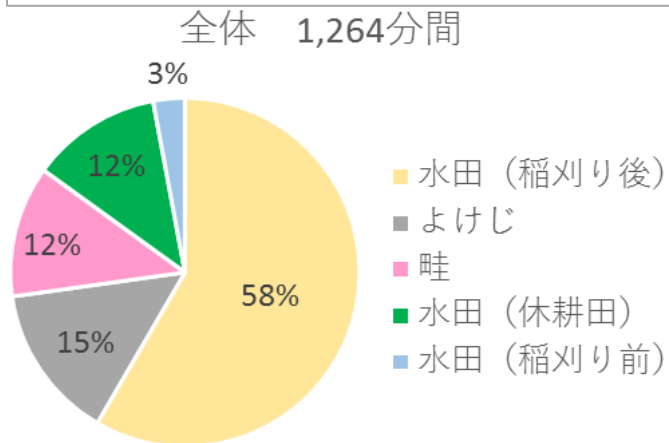
枯れた稲など植物
ごと食物を咥える

コウノトリ調査結果概要

・採食環境

9月

- ・水田（稲刈り後）を利用する時間が最も長く、よけじ、畦、水田（休耕田）、水田（稲刈り前）が続いた。
- ・採食する稲刈り後の水田の多くに、稲刈り機の轍による水たまりが存在。
- ・採食する稲刈り前の水田は稲が倒れている湛水水田であり、稲が伸びた水田での利用は確認されなかった。



※「よけじ」とは、水田内に排水促進や用水を温める目的で掘られた溝。この溝には、入水前や落水後にも水が溜まっていることが多いため、さまざまな水生生物が水田に水がない時期の生息場所として利用している。

12月

- ・水田（稲刈り後）が最も多く、約88%を占めた。
- ・河川（赤川）での採食も確認されたが、食物が獲れる割合は水田周辺と比較して小さかった。
- ・水田（稲刈り後）と水田（耕起）の採食時間の比率は19:1であり、耕起していない水田を好むことが示唆される。
- ・水田では耕起の有無に関わらず浅い水溜まりがあるような湿潤の場所が好まれた。

